

巻頭言

本誌は2012年に創刊された「恵寿総合病院医学雑誌」の第12巻にあたります。本巻には総説4編、症例報告4編の合計8編と当院で開催された過去1年間のTQM（Total Quality Management）大会での優秀賞6記録が掲載されています。

総説の一つは筆者自身が著者である“当院における令和6年能登半島地震発災後の約2か月間”です。震災に対する当院の対応や頑張りなどが系列に記載されています。心療内科からは“感情社会学からみた医師の労働と医師-患者関係—社会学者ホックシールドの感情労働論の知見を踏まえて考える—”，循環器内科からは“気温が心血管疾患に及ぼす影響について”，婦人科からは“子宮体癌早期発見への提言”と題しての総説が掲載されています。症例報告としては，“化学療法抵抗性のびまん性大細胞型B細胞リンパ腫に対してCAR-T細胞療法が著効した一例”，“COVID-19院内感染の3例とSpike抗体価測定による感染経路の推定”，“心電図所見と心臓超音波検査所見の経年的変化から診断に至った野生型トランスサイレチンアミロイドーシスの一例”，“脳血管障害を伴い抗リン脂質抗体陽性を認めた好酸球性多発血管炎性肉芽腫症の一例”が掲載されています。当院TQM大会優秀賞には集患対策，入退院管理，SNS活用，多職種協働セルケア方式，入院予約説明，医療秘書による診療情報提供書代行入力をテーマにした発表が選ばれました。

2024年1月1日16時10分。震度6強。令和6年能登半島地震が当地を襲いました。詳細は総説に記載してありますが、帰省中の家族との団らん中という方が多かった時の震災，そして大津波警報発令もあり、私たち住民にとっては衝撃でした。

さらに1月後半から、新型コロナウイルス感染症の第10波も襲ってきました。この第10波での入院患者数は、第8波・第9波に比較して、急激に患者数が増加したことが特徴でした。震災対応と相まっての重いダブルパンチとなり、職員の業務負担は重大でした。しかし、職員の頑張りや周囲の支援のおかげで、2月下旬から病院の日常は回復しつつあります。今回の経験を通じて、普段からの備え，知識，外部内部との良い人間関係構築，“災害でも医療を守る”という文化などの大切さを実感しました。通常業務・災害対応・コロナ対応などを行いながらの執筆や発表作業には多大な労力があつたと思います。当事者には後々，頑張った苦労は必ず報われるはずです。

ある専門家はこの第10波が治まる頃には日本は集団免疫状態となり，感染は落ち着くと述べていました。新型コロナウイルス感染は2020年冬から4年経過し，ようやく落ち着くと期待しています。そして，この震災を契機に能登の医療が，感染症や周産期医療も含め全ての面で強くなることを祈念しています。それが医療従事者の働き甲斐にも通ずると信じています。

最後に第12巻の発刊を祝するとともに，第12巻発刊に際し，大変なご苦労をされた新井編集責任者と大成編集補佐並びに飯山編集補佐に御礼申し上げます。

2024年4月吉日

社会医療法人財団董仙会 恵寿総合病院

病院長 鎌田 徹